

紙本着色

(前巻)総四〇・三×二四五〇・六

(後巻)総四〇・二×二二一一・八

鎌倉時代 十三世紀

わが国の鎌倉時代を代表する絵巻として、また当館の収蔵品中においても、『春日権現験記絵巻』と共に高名な絵巻である。文永十一年(一二七四)と弘安四年(一二八二)の二度にわたる蒙古軍の来襲―元寇の際に出陣した肥後国の後家人・竹崎五郎兵衛尉季長を主人公とする、いわゆる合戦絵巻である。

現在、前・後の二巻に仕立てられており、かなりの部分の欠失と錯簡(順序の移動)があるものの、概ね、前巻には文永の役と役後の季長の恩賞申請のための鎌倉下向について、後巻には弘安の役についての場面がまとめられている。その内容については、すでに歴史や美術史の諸先学によって様々な研究検討が重ねられてきているが、絵巻の制作以後、時代の下降にともなって破損・欠失・錯簡が生じたものに、その時々に応じて後筆を加えて編集し直しており、現状において多くの複雑な問題を含むこの絵巻の制作当初の姿を復原することは相当に困難である。しかし、元寇という歴史的事実についての貴重な史料であり、その描写においても優れた画技によって武器などを詳細に描いたもので、絵巻として優れた作品であることにはかわりはない。

現状の各詞書と絵は、概ね次のような内容で構成されている。(詞・絵の番号は、前・後巻を通してのもので、62ページ以降の小論及び資料等も全て共通する。)

《前巻》(文永の役と、その後の恩賞申請のための鎌倉下向について)

〈詞一〉博多の息の浜に蒙古軍が上陸したという知らせによって、季長は、一門の江田又太郎秀家と兜を交換して、これを目印に互いに助け合って戦うことを約束し、肥後国勢の先駆けをとって出陣した。

〈絵一〉箱崎宮付近の松原を行進する大友頼泰の軍兵と、季長主従五騎。

〈詞二〉太宰少式三郎左衛門尉景資の陣の前を、季長は馬上から先駆けすることを申し述べて、博多に向かって出陣した。

〈絵二〉景資の本陣。

〈詞三〉途中、赤坂で敵の首二つを薙刀の先に貫いて引き揚げてきた菊池二郎武房に会い、季長は勇み立った。

〈絵三〉駆けゆく季長主従。

〈絵四〉菊池武房配下の武者たち。

〈詞四〉菊池武房に敗れて塚原から鳥飼の汐干潟へ退却する敵軍を、季長は追撃するが、馬が干潟に脚を取られて逃してしまった。しかし、敵軍が鹿原から陣容を立て直して反撃してきた。鳥飼浜の塩の松原で攻防戦となったが、季長勢は、まず旗指が馬を射られて落馬し、季長以下三騎も負傷し、季長の馬が射られて跳ねた所に、肥後国の後家人・白石六郎通泰が援軍を率いて後方より攻め寄せてきたので、敵軍は鹿原へ退却した。

〈絵五〉後方から駆けつける白石六郎通泰の手勢と、その前に馬を射られても起き上がった駆け出す季長の旗指・資安まで。

〈絵六〉敵に追いつがる三井三郎資長(季長の姉婿)と退却する敵軍。

〈絵七〉馬を射られた季長と射かける敵、退却する敵軍。

〈絵八〉鹿原に陣を構える敵軍。

〈詞五十七〉文永の役翌年(建治元年)、季長は恩賞を申請するために竹崎を出発した。供は二人、旅費のために馬鞍を売り、願いが取り上げられなければ出家して戻らぬ覚悟であった。鎌倉に到着後、恩賞奉行であった秋田城介泰盛に、博多の鳥飼浜での先駆けの功について詳細に述べた。

〈絵九〉秋田城介泰盛の館と陳情する季長。

〈詞八〉季長の戦功は將軍に上申され、結果、所領安堵の下文と馬を賜った。

〈絵十〉秋田城介泰盛の館で馬を賜る季長。

〈詞九〉詞七と同文。

《後巻》(弘安の役について)

〈絵十一〉季長、負傷した河野通有を館に見舞う。

〈詞十〉菊池二郎武房が守備する石築地の前を季長一行が出陣する。

〈絵十二〉石築地前を進み行く季長一行。

〈詞十一〉海上の敵軍へ近づきたくとも兵船のない季長が、兵船を求めて四苦八苦する。

〈絵十三〉ようやく漕ぎ出した季長の兵船。

〈絵十四〉草野次郎経永、大矢野父子らの兵船。

〈絵十五〉太宰少式経資らの兵船の出撃。

〈詞十二〉季長は、なかなか自分の兵船が来ないため、隆正という者の兵船に従者も連れずに一人で乗り込んだ。しかし兜を置いてきたので、脛当を脱いで結び合わせて、兜の代わりにこれをかぶった。

〈詞十三〉季長は幕府の御遣・合田五郎の仮館で合戦の報告をし、彼は関東へその戦功を注進することを約束する。

〈絵十六〉敵船に乗り込んだ大矢野三兄弟と、敵首をあげる季長。

〈絵十七〉応戦する敵船。

〈絵十八―十九〉敵船。

〈絵二十〉志賀島の敵軍。

〈詞十四〉季長は志賀島海戦の戦功を肥後国守護・安達盛宗に述べ、記録をとられた。

〈絵二十一〉安達盛宗の陣所にて敵首を差し出す季長。

〈詞十五〉文永の役で恩賞にあずかった者の中で、直接に下文を賜り、馬まで賜ったのは季長一人であるので、大事の時には真つ先に先駆けすべきであることを、「永仁元年二月九日」の年記で記す。「別文書か」

〈詞十六〉季長は、関東下向に先だつて参詣した肥後国の甲佐大明神の御蔭で海東郡の所領を安堵され、その神恩に感謝していることを、「永仁元年二月□□」の年記で記す。「別文書か」

この巻末の年記の永仁元年＝正和六年（二二九三）は、かつてその改元が八月であるため、永仁元年二月の年記には問題があることが指摘された。その後、この年が季長にとっては特別に意義深い年であるとの考証が加えられた。それによれば、元寇の後、季長が恩義を受けた安達泰盛と盛宗の父子、文永の役の時の指揮官であった武藤景資は、弘安八年（一二八五）に起こった幕府の内乱―霜月騒動―で悲運に倒れるが、季長はその難を逃れた。そこで季長は、泰盛らへの追慕と感謝の念を込めて、また己の戦功を子孫に伝えるため、さらに甲佐明神への報賽のために、絵巻制作を発願したのではないかと考えられ、季長が同年に甲佐社（海東社）に奉仕すべき条項を定めて子孫に置文を残していること、そしてこの絵巻巻末の詞書の内容から、絵巻制作はほぼこの時期と考えてよいのではないかとされている。

この絵巻の伝来についても、制作当初の様子がはっきりしない。甲佐社に奉納したもの、竹崎家に伝来したものなどの推論が交錯している。しかし同絵巻に付属する大矢野家からの伝来書によれば、

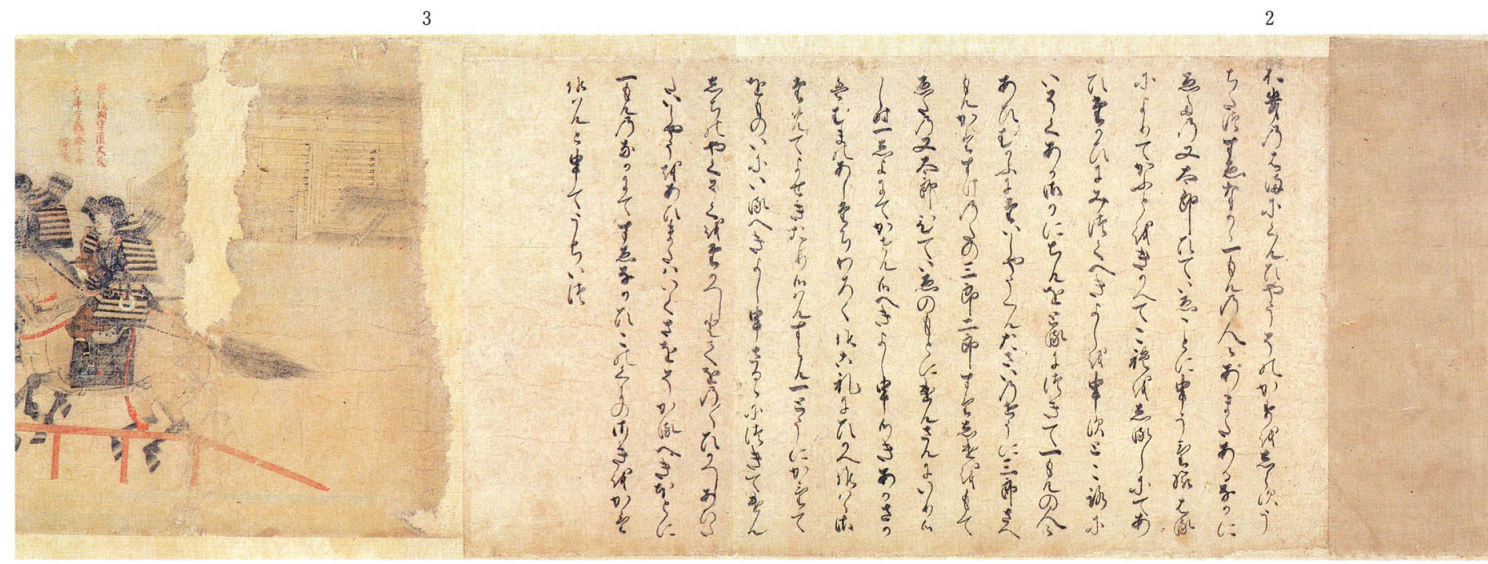
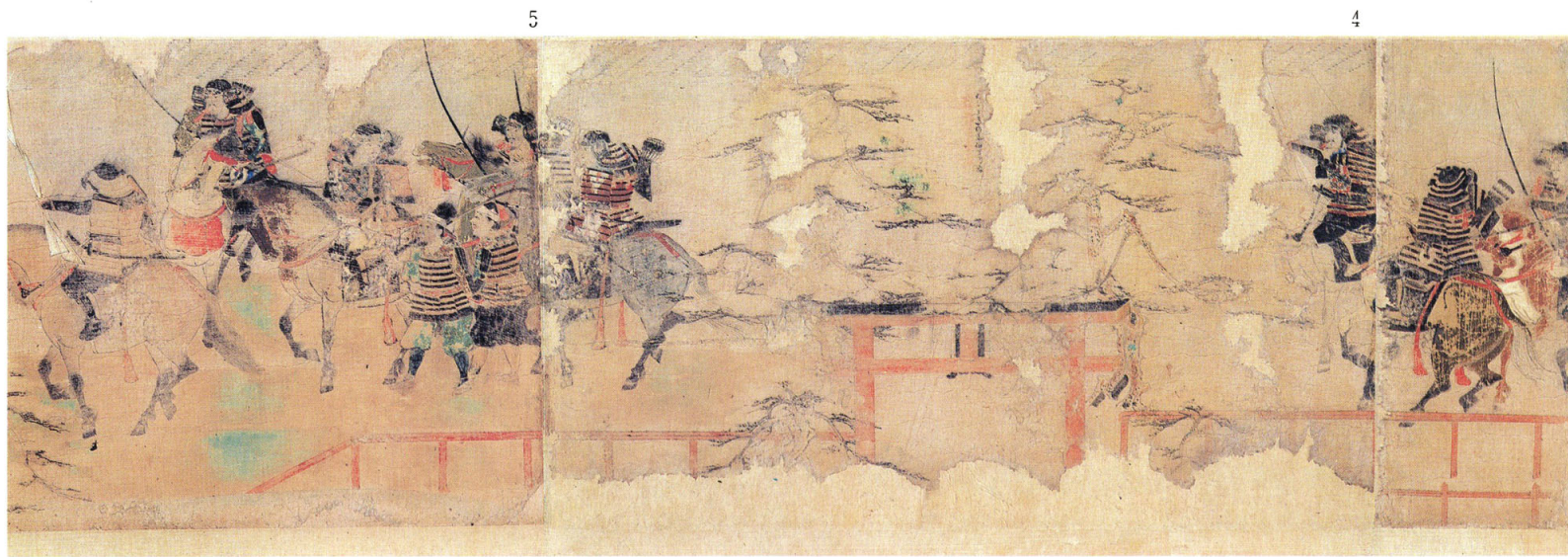
絵巻は季長が自分自身の働きと目撃したことを、土佐長隆・長章父子に描かせ、詞書は自筆して家に伝えた。数代を経て家が衰退し、宇土城主伯耆佐兵衛尉顕孝（伯耆の名和長年の家系）に伝わった。そして顕孝の娘が肥後

国水草大矢野城主・大矢野民部大夫種基（絵巻に登場する大矢野三兄弟の子孫）に嫁ぐ際に贈られた。種基は長男と共に、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に出陣して戦死。そのため、幼い孫・安松は時の宇土城主・小西行長の保護を受けて絵巻を伝えるが、行長が熊本城主・加藤清正に亡ぼされるに至り、清正と種基は懇意であったので安松はその保護を受ける。安松は成人して直重と名を改め、その長男・種次は、清正の長男・忠廣に仕えるようになる。しかし忠廣が出羽の荘内に転任した後、肥後国の藩主となった細川忠利に仕えた。絵巻物はこのように代々伝来してきた。

とある。その間、この絵巻は、寛政五年（一七九三）に松平定信らに所望されて江戸へもたらされ、いくつかの模本が作られた。そして寛政九年に熊本藩にて国学者・長瀬真幸らの考証を経て修理され、現状の姿となった。大矢野家は文政八年（一八二五）に、絵巻の散佚を恐れて細川家に保管をゆだねたが、明治二年の廃藩と同時に大矢野家に戻された後、同二十三年十二月に大矢野十郎から宮内省に買い上げられ、平成元年に国へ寄贈されるまで御物として伝来してきたのである。

絵は土佐長隆・長章父子により、詞書は季長自身によるとされるが、いずれも伝承の域をでない。現状において、画風は全体を通して一様ではなく、おおよそ3タイプに分類できる。と同時に、詞書は5タイプに分かれ、絵と詞書では一紙の縦・長のいずれの寸法も一様ではない（64ページ表参照）。従って、この絵巻には、数本の絵巻が混入している可能性が高く、当初のこの絵巻の姿を考えるには、欠失・錯簡が多いことや、絵には後筆による画面の改ざん（剥落などの損傷を補修するための修理的な加筆、錯簡を補正するための加筆など、様々な意味のものがある）が見られることなどもあってかなり困難であり、今後さらなる調査を行い、検討を加える必要がある。

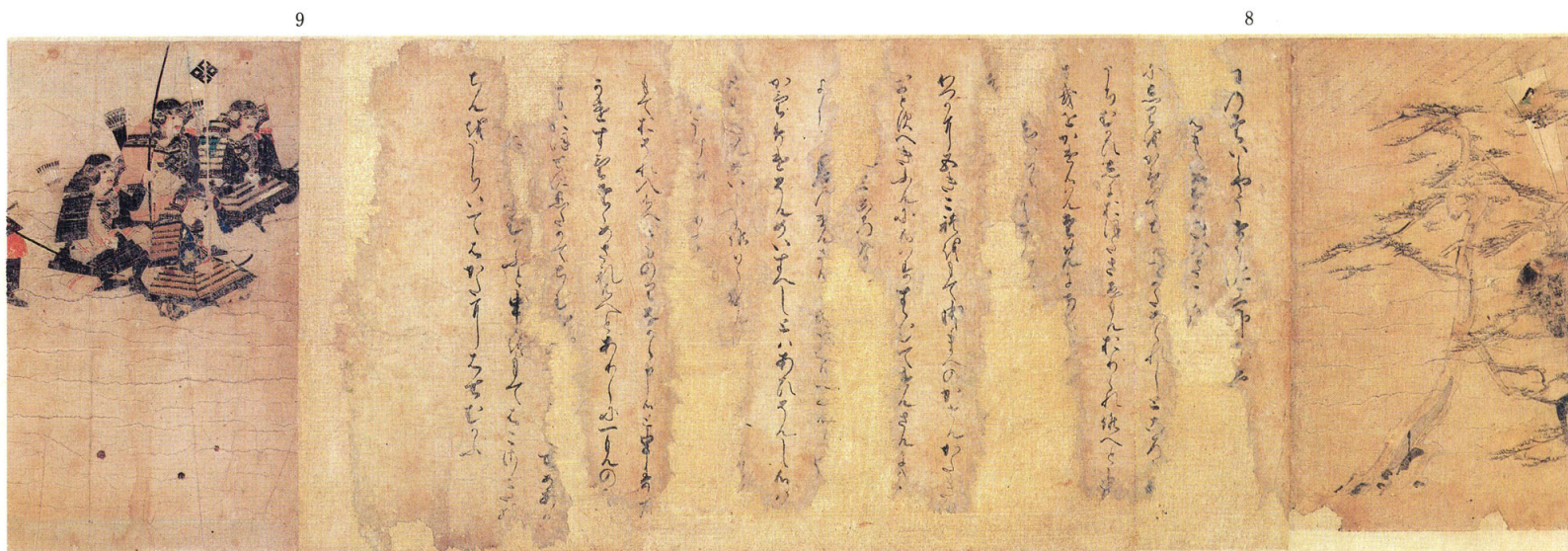
しかしこの絵巻において、前巻第9紙の少式景資、後巻第2紙の季長、後巻第6―8紙の石築地の菊池武房を中心とする武将ら、後巻第40紙の安達盛宗の甲冑姿の描写は実に見事である。絵巻の画風などが一様ではないため注意は要するが、描かれている甲冑は、総体的に、鎌倉時代後期の様式である御嶽神社の紫裾濃威鎧までの古様な様式を示していることが指摘されており、この点からも、絵巻は鎌倉時代後期の制作と考えて良いとみられる。



季長一行の出發

絵1

詞1



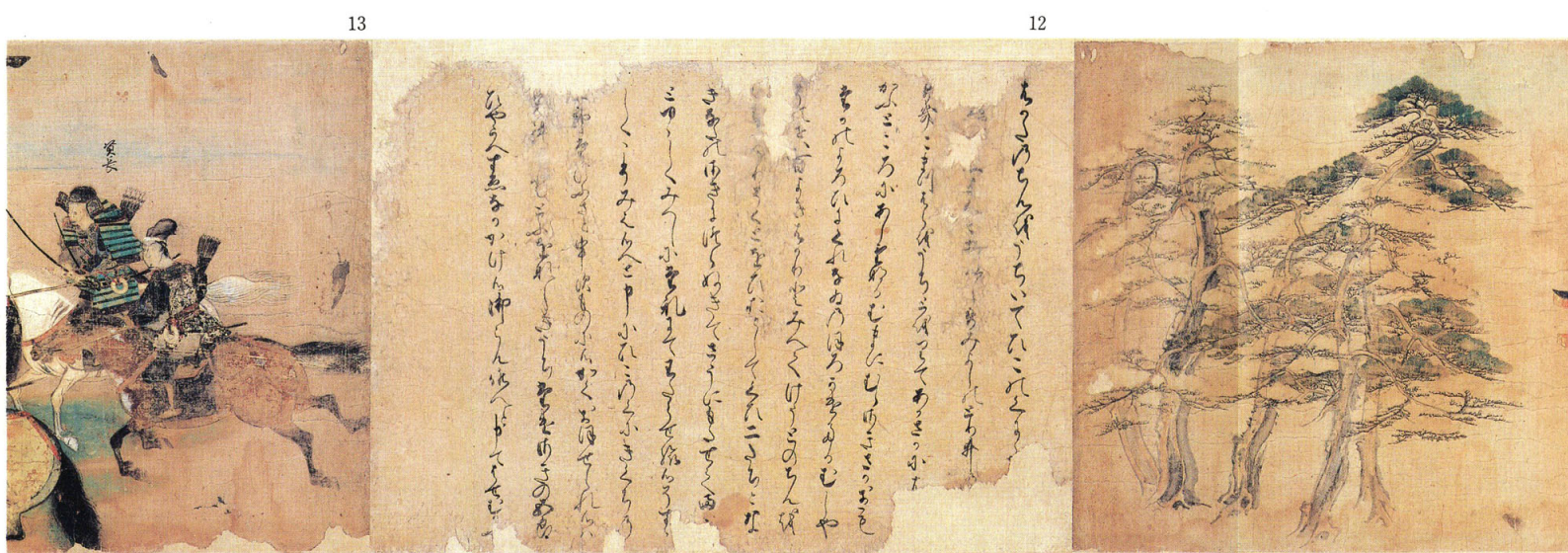
絵2

詞2



7

6



駆けゆく季長主従

絵3

詞3



11

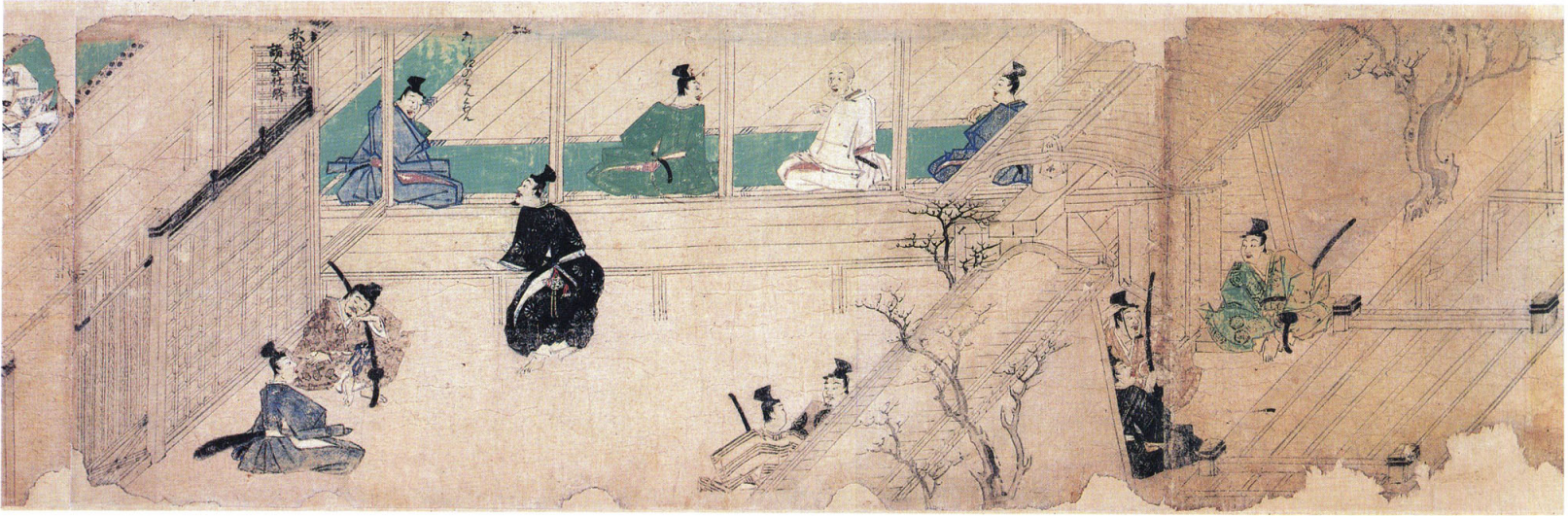
10

少式三郎景資の陣



33 長門守の御書... (Handwritten Japanese text, vertical columns)

32 31 30 長門守の御書... (Handwritten Japanese text, vertical columns)



秋田城介泰盛の館

絵9

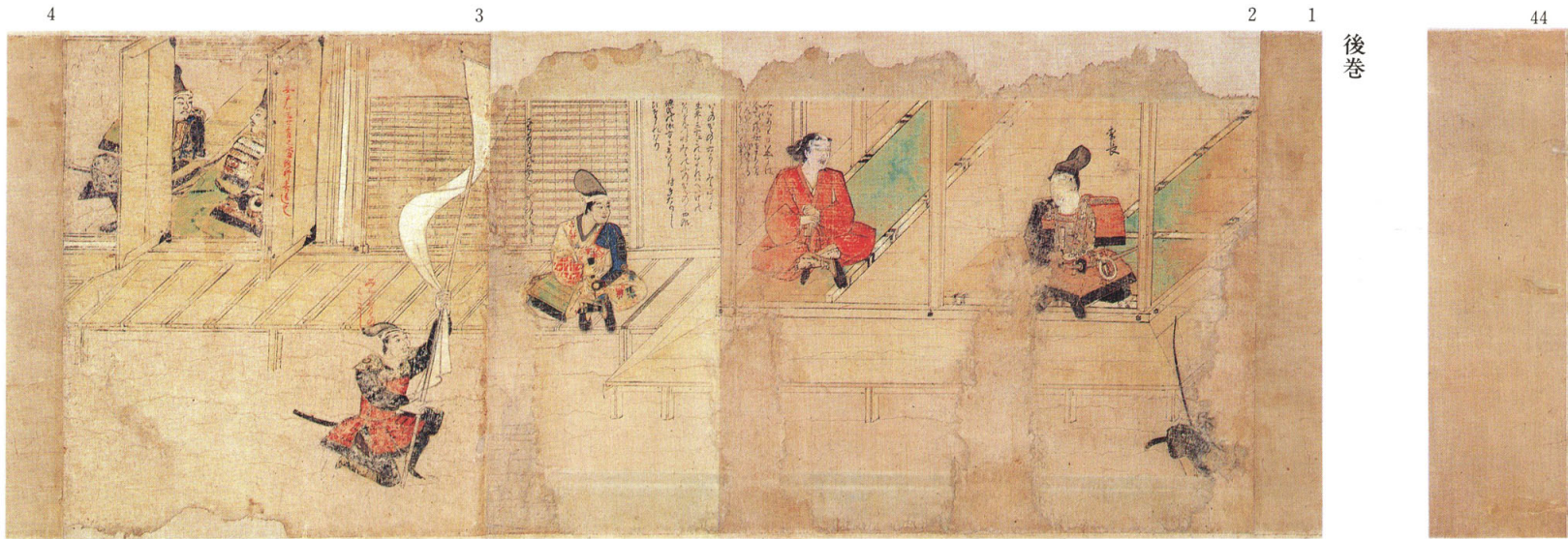
39 長門守の御書... (Handwritten Japanese text, vertical columns)

38 37 36 35 34 33 32 31 30 長門守の御書... (Handwritten Japanese text, vertical columns)

絵10

詞8

泰盛に訴える季長



季長、河野通有を見舞う 絵11



馬を賜る季長 詞9



8



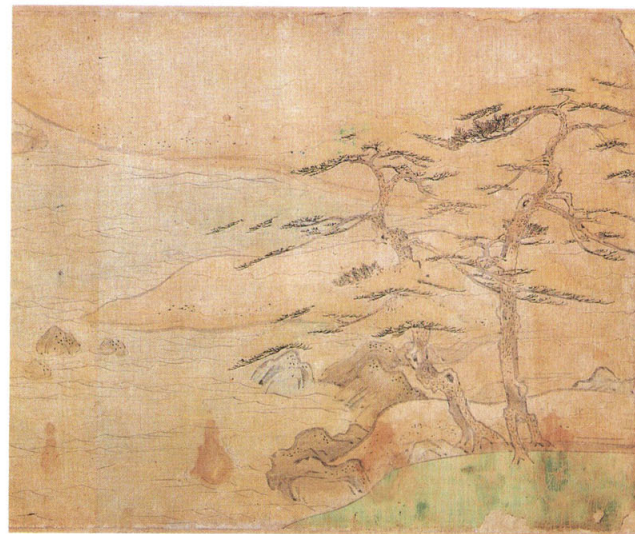
石築地前を出陣する季長一行 絵12



兵船で漕ぎ出す季長たち 絵13



詞11



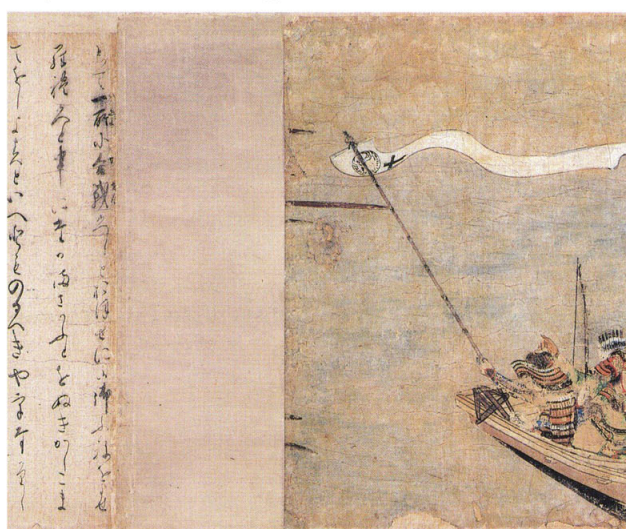
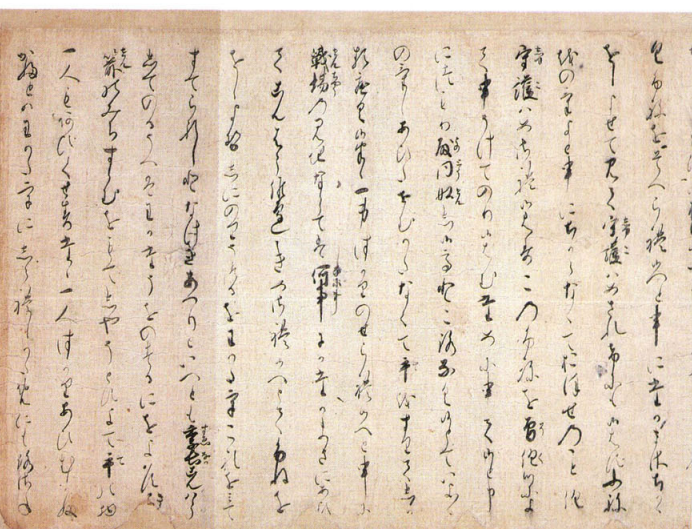
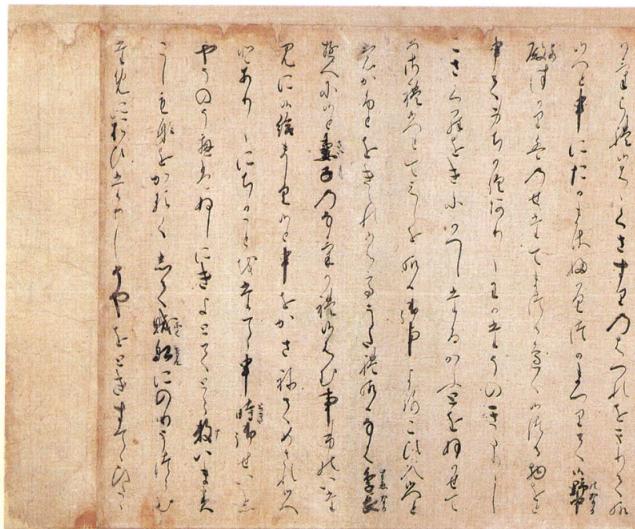
絵15



草野次郎・大矢野父子らの兵船



絵14



詞12



少式経資配下の兵船



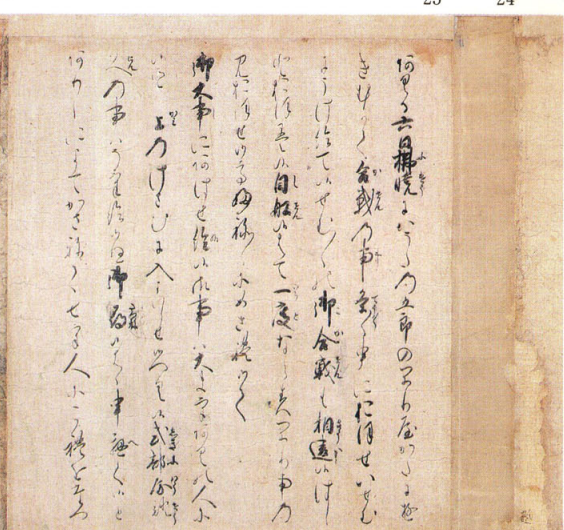
絵17



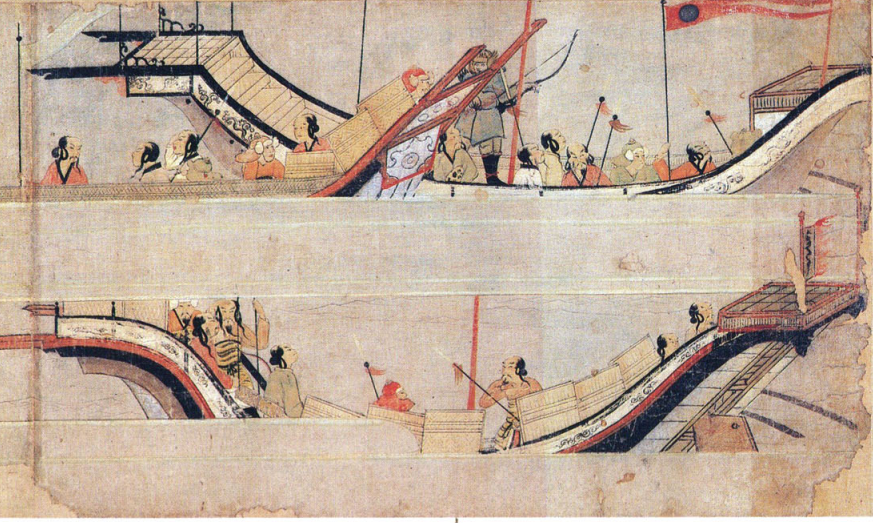
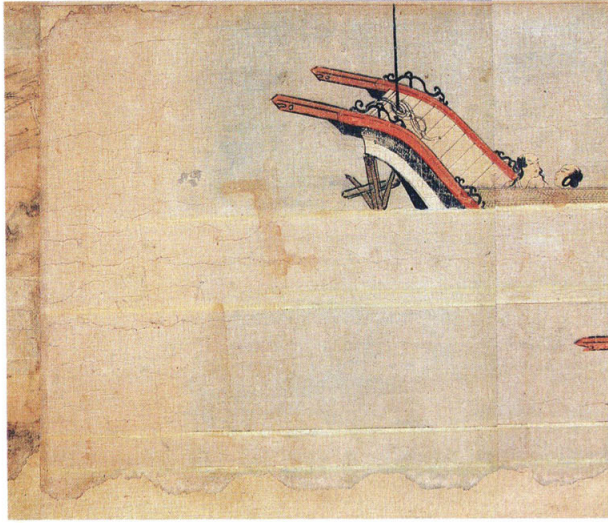
応戦する敵軍



大矢野三兄弟、季長ら、敵船に討ち入る



詞13



絵20

敵船

絵19



敵船

絵18



Handwritten text in vertical columns on the right side of the illustration.

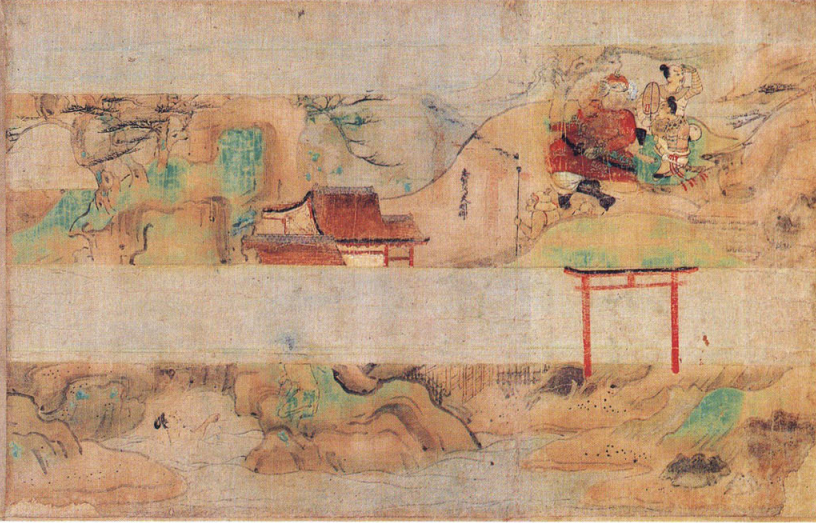
敵首を差し出す季長

安達盛宗の陣所

絵21

Handwritten text in vertical columns on the left side of the spread.

詞14



志賀島の敵軍



Handwritten text in vertical columns on the left side of the spread.

詞16

Handwritten text in vertical columns on the right side of the spread.

詞15



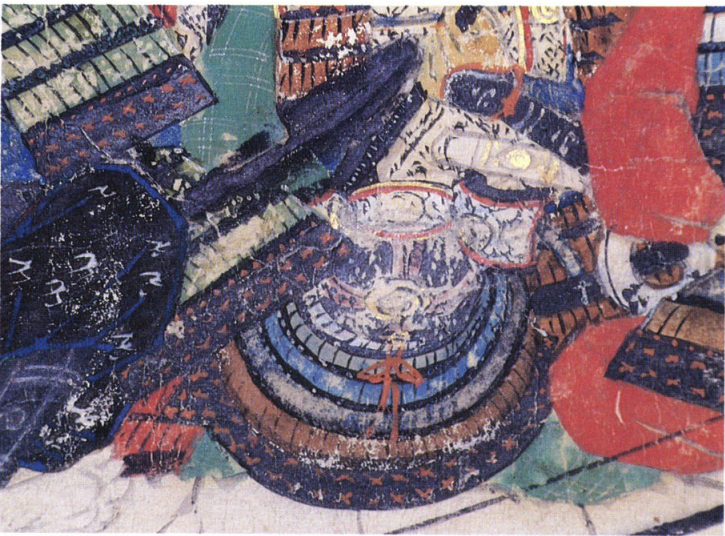




前卷第5紙



前卷第6紙



後卷第6紙



後卷第7紙



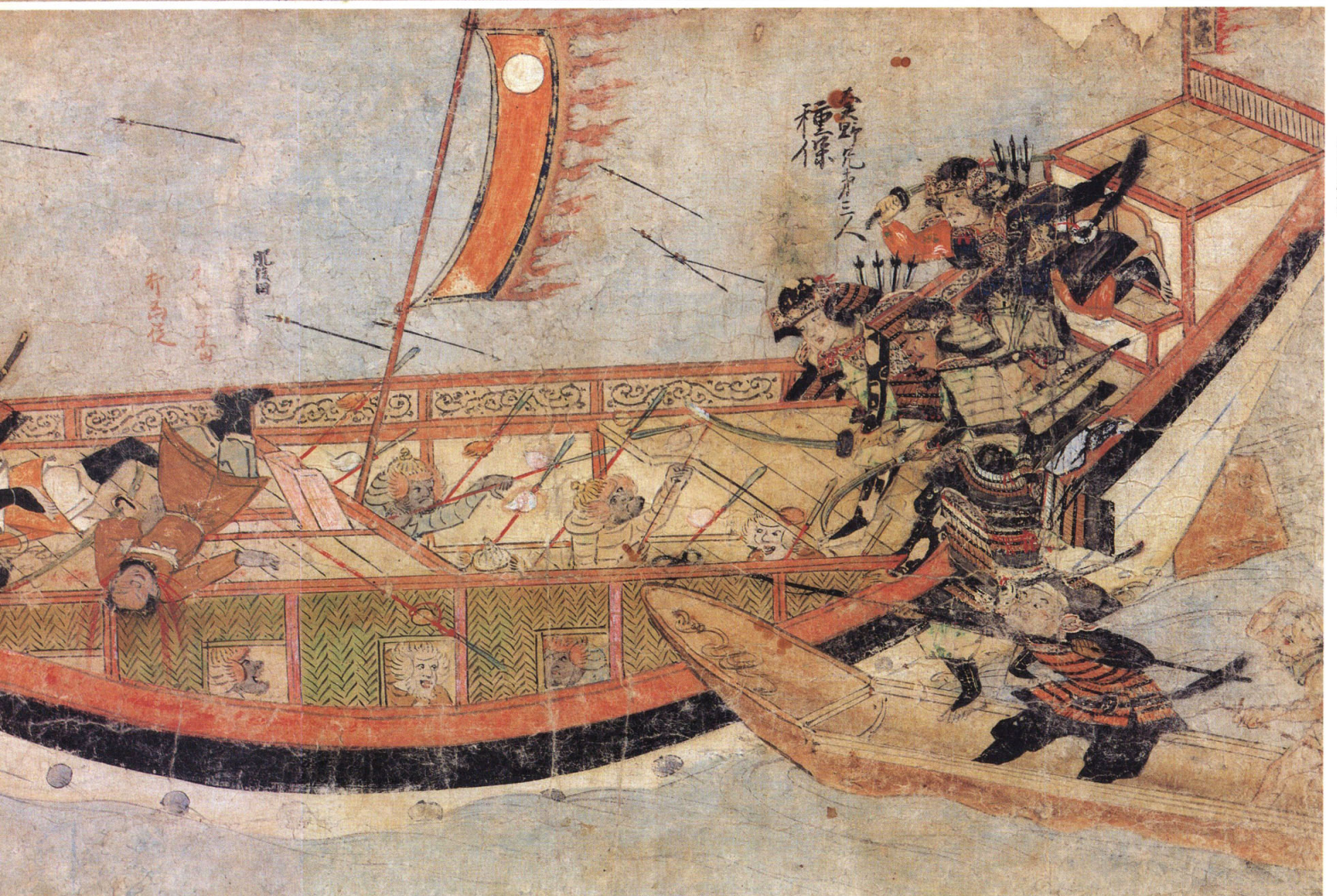
後卷第40紙



後卷第15紙







- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

絵巻―蒙古襲来絵詞、絵師草紙、北野天神縁起

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 5

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 大塚巧藝社

デザイン 大石一義

翻訳 鶴岡厚生

発行 宮内庁

平成六年十月八日発行

© 1994, Museum of The Imperial Collections